会　議　録

会議の名称	第３回行田らしいまち並みづくりとにぎわい創出基本計画検討委員会
開催日時	平成２６年１月１０日(金) 開会：午前１０時５分　閉会：午前１１時４０分
開催場所	行田市産業文化会館２階　第２会議室
出席者(委員) 氏名	田尻要　桑田仁　佐野友昭　宮本伸子　朽木宏　沖本孝之　並木政夫 富岡誠　（名簿順・敬称略）
欠席者(委員) 氏名	横田康介　（敬称略）
事務局・担当課	【企画政策課】岩田政策推進幹　田島主任 【文化財保護課】中島課長 【商工観光課】吉田課長 【都市計画課】栗原課長　加藤主幹　金子主査
会議内容	議　事 （１）　モデル地区の方針と具体的施策について（資料１） （２）　事業推進に向けたプログラムについて（資料２）
会議資料	（資料名・概要等） • 次第 • 資料１　モデル地区の方針と具体的施策 • 資料２　事業推進に向けたプログラムについて • 参考資料　目次 • 説明資料
その他必要事項	傍聴人３名

発　言　者	会議の経過（議題・発言内容・結論等）
	１　開　　会 ２　あいさつ ・田尻委員長あいさつ ３　議　　事 （１）モデル地区の方針と具体的施策について （２）事業推進に向けたプログラムについて ・関連議題であることから一括議題 ■　資料１及び２を用いて事務局より説明 審議
田尻委員長	・事務局に伺うが、資料作製段階でこの辺がまだフラットで、メリハリがなく、計画書としてまだ弱いと思われる箇所はあるか。
事務局（金子）	・今、あるものを活かしてまち並みをつくり、そこから新たに賑わいを創出することが、今回の計画の狙いでもあることから、例えば空き地や駐車場など、低未利用地を何かしら梃子入れができないか、と考えている。行田市都市計画マスタープランにおいても、都市機能の集積ということで、モデル地区はまさに都市拠点の位置付けがなされており、この点も踏まえて賑わいを創っていきたい。また、モデル地区では人口減少や高齢化も顕著であることから、それらの視点を踏まえたアドバイスを頂戴したい。
田尻委員長	・目指すべきは機能を集積し、人口密度の高いエリアを作ることだが、その地区は人口が減少し、高齢化も進行しているということが鍵なのだろう。それらを踏まえ、どの辺をより一層注力していかなくてはいかないか、ということになる。
宮本委員	・様々な計画をよく網羅して挙げており、これらに優劣を付けるのは難しいと思うが、優先度については、当面、平成２６年度位にできそうなもの、それも今、何か種があって、それを担っている人が多少なりともいて、それを膨らまして、このにぎわいを作る事業として、起爆剤としていけそうなものを、二つか三つ選んでいく方が、実行性があるのではないかという気がし

	ている。また、個人的に祭りがあまり入って無いような気がする。伝統的な祭り、新しく作った祭り、あるいは、それを盛り上げてきた祭り、いろいろな祭りが市内にはあるわけであるから、このような今でも人が集まっているものに更になにかを加えていくことを、もう少し考えたらどうかと思う。
朽木委員	・いろいろ網羅されていて良くできていると思うが、市民を巻き込み、自発性を促していく、というところにもう少し具体的な未来像みたいなものがあると良いと思う。行田がこうなったら良い、というイメージがあり、そのためには今これだけの資産があり、それをどのような方向性に向かわせていくのかということを共有していかなければいけないと思う。先日のワークショップでは、市民からは案内表示が無くて分かりにくい、あれが無い、これが無い、という意見があった。ちなみに愛媛県の大洲（おおず）市は、人口規模的には行田とさほど変わらないが、「おはなはん」というＮＨＫのテレビドラマのロケ地に使われたことをきっかけに、徐々にまち並みを綺麗にしていったと思われたが、実際はごく一部だった。訪れて思ったことは、サインは殆ど無く、ミシュランガイドにも掲載されている臥龍山荘に至るまでの道のりにも、どこにもサインは無く、あっても「この先、臥龍山荘」と書いてある程度であった。要するに、設置した以上はその費用がかかり、維持管理費もかかることから、出来る事から始めて将来的な方向性が間違ってしまってはいけないと思う。出来る事から始めるということは、ポイントポイントでは出来てはいるのだとは思うが、それらポイント同士を将来繋げた時に、こういう行田市の未来像になる、ということを示す必要がある。ここでは、ポケットパーク等が位置付けられているが、将来的な全体像の中にこのようなデザインで良いのか、という話には至っていないと思う。
桑田委員	・資料１では、前回の検討委員会で指摘のあったまちづくりの人の活動について記述が弱いのではないか、という意見を踏まえ、今回は反映されているが、まちづくり活動の参加者を増やすと

	いった、人が主体となり、育てるようなところが非常に大事であると思う。例えば、市民が活動を起こすときに、それが具体的にどのような政策に落とし込まれるかはわからないと思う。そのためにも、行政側はワンストップ窓口を用意しておくことが、複合的な政策ではないかと思う。本日の検討委員会の事務局においても様々な部署が入っており、この仕組みを継続し、まちの人がやりたいということを行政内で上手に政策に振り分けられると良いと思う。市民からはワンストップのような窓口が一つで、内部で上手に振り分けるなどした、分かり易さが大事かと思う。
事務局（岩田）	・朽木委員、桑田副委員長の発言にもあったが、本検討委員会には事務局として、都市計画課・企画政策課・文化財保護課・商工観光課の４課が出席している。ワークショップも同様に４課で対応しており、今後この計画を概ね１０年をスパンとして推し進めていく中で、行政側は４課で連携を図りながら推し進めていく予定だが、市民の方からは、どこに聞いて良いか分からない、というようなことが起こると思う。窓口をどこにするのか、すぐに決定することはここでは出来ないが、問い合わせや市民の自主的な活動などの連携をする上でのワンストップについては、今後検討を具体的に行っていきたい。
田尻委員長	・行田市でもそれを行う動きがないわけではなく、都市計画のところまで届くかどうかは別だが、市民活動の皆さんのワンストップ窓口として、中間支援的なコミュニティーセンターみたいなものを作る動きは出来つつある。ただし、それでもいますぐには難しく、どうしても数年はかかってしまうだろうとは思う。
桑田委員	・市内部での仕組みだと手間も時間もかかるが、一方で地域の協議会はどんどん立ち上がっていくイメージがあると思う。そういった時に、多かれ少なかれ何かしら始まっていくと思う。そのため、公式的には上手に行われなくても、内部の対応で、こういう窓口があるとまでは言えないけれども、今の所はここにいってくれれば何とかするよということが市民の方に伝われば

	良いと思う。行田市のような規模の街であったら、職員の人と市民の人の顔が見えるわけだから、そのような対応もできるのはないかと思う。ただし、これを計画に書き込んでほしいというわけではなく、今後行って欲しいという期待を込めて提案した。
事務局（金子）	・今回、まちづくりワークショップニュースを発行させて頂いており、その際には、都市計画課担当職員のフルネームを記載している。なお、本計画をメインで作成しているのが都市計画課ということになるので、まちづくりを進める中での問い合わせ先は、当面、都市計画課にて対応させていただく。
事務局（岩田）	・補足的に申し上げると、例えば市民の主体的で自主的な活動という部分だと、現在、地域づくりを行っている担当課が本日出席の４課以外にもある。それについては、市民においてもそこが窓口ということで、ある程度、活動を行っている方には認知もされているため、その点も踏まえた検討を行っていきたいと思う。
桑田委員	・大宮の氷川神社の前にある氷川参道のまちづくりに携わったが、そこでのまちづくりが上手くいった要因の一つに、経験豊かな看板職員の存在が挙げられる。現在は異動してしまっているが、立ち上がり時も含めて、同じ職員が長く携わっていると市民も安心できる。
田尻委員長	・まさに、地域づくり支援課で現在、そのような取り組みを行っているところであり、市民の方々もいろいろ相談を持ちかけているようで、そこで得られた情報が庁舎の中で共有されていないという事は決してないと思うが、今回のまちづくりにどのように落とし込むか、というところまではまだ難しい段階なのかなと思っている。
宮本委員	・ｐ３の「モデル地区の方針」には目指すべき目標が４つ記載してあるが、全て増やす取り組みになっている。そこには現状値が記載してあるが、どこまで増やすのか、どの位を目標にするのか、という大事なところが全て記載されていない。市民の方

	が見たら、目標がわからないと思う。もちろん１００％はあり得ないと思うが、かなり高い目標にするのか、あるいは現状が３０％前後であるならば、少なくとも５０％を超える目標値を設定するのが良いか、あるいは倍々としていくのか、そのあたりがいい線ではないかと思う。また方針４は方針１、２、３と異なり、住みたいと思う人を増やすというのは、市で様々な政策を立てて取り組んでいることはわかるが、この「訪れたい」という人をどのように増やしていくのか、「のぼうの城」を一過性で終わらせることなく、いかに継続していくかが大事だと思う。様々な政策を続けていかなくてはいけないが、最近、見たテレビ番組で、通常“ホーム”とは家をイメージし、我々の中ではホームタウンであるとかホームというと割合、定着しているイメージがあるが、その番組で特集されたとあるジャーナリストは定着していない、いわば放浪人で、彼にとって“ホーム”というのは、自分が心の落ち着きを感じられるところ、と言っている。そうした意味では、行田のまちがここに住んでいる人も、周辺に住んでいる人も、ここを訪れた人も、初回の検討委員会で申し上げた“奥座敷”のような、ここに来るとほっとできる、そのような雰囲気づくりが出来たらいいのではないかと思う。一度でも行田に足を運んだ人が、訪れたい、住みたいという人の中に入ってくれれば、今は一万人足らずの人数になっているものが、より増えていくことを目標に掲げても良いのではないかと思う。
事務局（中島）	・宮本委員が言われた意味合いとは少し異なるかもしれないが、最近「サードプレイス」という、職場や家庭ではない第三の居場所、という意味の言葉をまちづくりの中でよく使われるようになっていて、そのような場所が人を集めることができる場所につながるという意味で、行田市の中心市街地がそのような場所になるよう、目標に掲げてみてはどうかと思う。また、今回、本計画策定にあたり市民との交流という意味でワークショップを実施したことが事務局としては非常に良かったと思う。従来

	はまちづくりというと、そこに住んでいる人、特に中心市街地だと商店街の連合会などが、まちづくりを考えているというかたちになっていたと思うが、ある議員が議会において当該地区は行田市の顔だということを発言していたように、やはり行田市の顔なので、地域の人だけが考えるのではなくて、市全体の人が行田市の顔を考えるようになることが望ましいと思う。その点に関心を持ち、訪れていただけるようになっていく形が、ワークショップを繰り返すことによって図られていくのではないかと思い、そのような効果も狙っていきたいとは考えている。
沖本委員	・宮本委員の意見と同じで、資料１の表紙には事業主体について記載されているが、「推進します」とか「促進します」というのは誰が行うと記載があるが、「つなげます」、「形成します」という言葉について、文章を読んでみると、市が主体ではなく、市民の方々や商店街の方々が主体的に図っていく、つなげていく、形成していただくものが入ってくるのではないかと思う。また、ｐ２の問題点について、私の読み方がこれでいいのかということを確認させていただきたい。最初にある根底の問題として、人口減少や高齢化が進行しているという大きな問題があり、その結果、未利用空間の増加や市民活動の主体間の連携不足が生じてきているといった、問題点が二段階で記述されている。そこで、最後に「この問題を解決する必要がある」とあるが、「この」問題というのは４つともなのか、それとも低層部分なのかを教えていただきたい。どれを解決すべきかというと、私は４つ全てではないかと思っているが、それで間違いないのか確認させていただきたい。また、宮本委員の意見に繋がると思うが、ｐ２＜参考＞図２は、「のぼうの城」を見た時になかなか面白い部分があるなと思っていたが、今、行田市の名が非常に売れている一つの要素としては、「のぼうの城」があると思うが、この図からは凡例が全く見えず、もったいないと思う。この計画書を見て、行田市に行ってみたいなという人がいると思うので、行田市の魅力のある部分をもっと見えるように描いてみてはど

	うか、という気がする。また宮本委員と同意見だが、目指すべき目標として現状値が書かれているが、本来ここには現状値ではなく目標値を記載すべきだと思う。
事務局（金子）	・モデル地区の問題点等については全て沖本委員の指摘どおりで、それぞれが問題点であると認識している。問題点が今回の資料のｐ１、２だけで良いのかというところもある。当然、問題点・政策課題があって施策が打ち出されるのであって、参考資料を見ていただくと、第５章と第６章が複合的な構成として、資料１という形にしており、参考資料の第５章というところで大きくモデル地区の選定の目的、理由、概要、市民意向と課題、これがワークショップや市民アンケートなどを踏まえて、問題点から問題、さらには政策課題という形の中でもう少し肉厚して整理をさせていただきたいと思っており、すべてが問題であるという認識は沖本委員と同じである。それから魅力がある部分をもう少し表現してはどうかということだが、私どももｐ２のモデル地区の概要の表し方が、このままで良いのかというところがある。概要をより肉厚にし、魅力的な部分も合わせて整理をさせていきたいと思う。更に、ｐ３、４の目指すべき目標に現状値があって目標値がないのか、という宮本委員の指摘についてだが、現状値は実際に活動を行っている人についての指標という訳ではなくて、平成２５年度のアンケートで、今後このような活動に携わっていきたいと回答の得られた人数を設定している。その中でどの程度増やすか、というトレンドや推計が非常に難しいこともあり、先程、宮本委員からも指摘があったが、どの程度伸ばすかは数値の設定が難しかったことから、提示し切れなかった。なお、方針１、４については、総合振興計画の指標を使っており、そちらにおいては根拠を付けての説明は可能である。方針１、３の目標は、全市のアンケート調査を用いており、第４章で全体の方針等を作っている。そのようなところを見定めながら目標の位置付けなどを再度、整理させていただきたいと思う。今はモデル地区の中での方向性しか示さ

	れていない、全体の目標をまだ見せていない段階だが、それらを含めてまとめあげたときに再度、見直していきたいと考えている。
田尻委員長	・資料１の表紙にある、「図ります」、「つなげます」なども精査するということでよろしいか。
事務局（金子）	・精査させていただく。
並木委員	・資料２のｐ１６からｐ１８の重点的な取組みの流れにおいて、重点箇所Ａ、Ｂ、Ｃとあるが、Ａだと商店街を再生したい、Ｂだと路地空間を歴史が感じられるまち並みにしたいという意思表示となっているが、具体的に何を再生したいのかを市民にも分かるようにしてはいかがか。例えば重点箇所Ｂの歴史が感じられるまちは、足袋蔵などが具体的に市民の方に伝わるようにすると将来イメージを明確に共有でき、みんなでなにかを考えようか、と思えるようになるのかと思う。
沖本委員	・資料１のｐ７「方針別の具体的施策」について、文章の流れや表現の問題として、「～をします」と記載してあるが、その結果、何が生じ、どのような結果を期待している、という流れで本来記載されるべきかと思うが、ここではそのような流れになっていない。例えばｐ８の１－５「支援を推進します」という話は最終的に何をやりたいのか分からない。支援をすることが推進する目的なのか、という表現になっているので、その点をもう一度読み直していただきたい。また、ｐ１２の２－５「商店街におけるにぎわいと歴史が感じられる店舗前空間の形成」について、花や緑で彩ってベンチを据えることにより、歴史を感じることができるのか分からない。また、ｐ１２の２－６で、童・銅人形はとても魅力的だが、童・銅人形があるまち並み・通りと記載があるものの、写真にはあまり魅力的に映っていないため、魅力のあるものはもっと大きく掲載してもいいのかと思う。ｐ１５の「わいわいコンテナプロジェクト」について、私は全然知らなくて逆に調べさせてもらったところ、佐賀市が皮切りになっているのは間違いないようだが、実は深谷市でも「わい

	わいコンテナプロジェクト」と類似した事業を行っており、一度検討いただければと思う。
事務局（金子）	・まず並木委員から意見のあった「わかりやすいように」との意見だが、ワークショップにおいても、しっかりコンセプト等を定めて、その方向に向かって施策を展開してほしい、という意見もいただいている。今回の資料自体、体系的にもう少し見直さなくてはならないと考えており、特に重点的な取り組みについて今回資料を提出させていただいたが、ここでいいのかというところもある。スケジュールや全てを出した後に、ここの場所という見せ方をしていることからも含めて、一体として再検討をさせていただきたいと考えていたところである。沖本委員の意見については、原則、本市に近い箇所から実施例として採用しようと努めてきたが、深谷市の事例を知らず、九州地方を例示してしまった。今回、沖本委員から資料を提供いただいたことから、身近なところからそのような活動を行い、行田市民として真似るのではなくて、新たなものを作りながら施策として展開ができればと思っていることから、その点を計画書に反映をさせていただく。内容については再度調査をさせていただき、文言、特にベンチを置いて「歴史が感じられる」という文言は訂正しなければならない。再度確認したうえで、委員の皆様には資料を提供したいと思っている。
田尻委員長	・並木委員からも指摘があったが、言葉のイメージ、主語などの明確化についても事務局で精査いただきたい。
佐野委員	・資料２のｐ１３「役割分担とスケジュール」の「２－１景観形成に関するルールづくり」は平成２８年度から事業・活動実施期間として記載されているが、実施計画の策定は平成２６年度から行っていく考えで良いのか。また、ルールに関してその他の建築物の保存や活用、まち並みの環境整備、まち並みの修景、これらもルールを策定するとなると影響が生じてくると考えられ、ルールに統一感を持たせるようなことも考えていかないといけないと思う。従って、ルールづくりを行うには、目標など

	に絡めながらやっていかないと、目標とするまち並みが形成できないのではないかと思う。
事務局（金子）	・景観形成に関するルールづくりの事業・活動実施期間においては、平成２８年度から、と位置付けさせていただいたが、来年度以降においても実際に地域に入ってワークショップを実施しつつ、それぞれの重点ゾーンも位置付けていることから、どのようなまち並みにしていくのか、という議論については来年度からでも実際に進め、お互いに地域の方々、あるいは事業者、ＮＰＯの方々等と議論していきたいと思う。当然、佐野委員から意見のあった、目標があり、それを実現していくような取組みとなることから、体系付けは整理をさせていただくので、２－１についてはそのようなことも、ひとつのルール作りに繋がっていくものであることから、平成２６年度から事業・活動実施期間に修正をさせていただく。
富岡委員	・私は、市民の代表である公募市民として出席していることから、市民の立場で考えてみたが、宮本委員から意見があった資料１ｐ４の方針４の目指すべき目標において、「訪れたい、住みたいと思う人を増やす」とあるが、彼らをどのように増やしたらいいのか、ということを本計画にどのように落とし込んでいくのか、という話は別として、行田の歴史、ストーリー性、例えば、行田は足袋産業が盛んであったというストーリーがわかると興味を持ってもらえると思う。そこに限らず、行田がどのような街か、認識してもらう為のストーリー性を持ったまちづくりを進めていくべきだと思う。行田に住んでいる人が「行田に住んで良かった」であるとか、訪れる人が「行田は歴史があって魅力がある」ということを広く知ってもらえるよう整えて頂きたい。また、川沿いも整備され、自転車で訪れる方が多いと思うので、彼らが立ち寄って休めるような空間を作っていくことを具体的に考えていただきたい。
事務局（金子）	・歴史があり、ストーリーを持ったまちづくりを進めた方が良いのではないか、という提言をいただいたが、それらはもちろん

	考えていかなければならなし、これから新たに作るものについても、将来的には歴史や文化となっていく。そうした両面性を持ちながら、これからのまちづくりを進めていくことも非常に重要であるので、その点をお互い調和させるよう、整理させていただければと考えている。
宮本委員	・資料１ｐ１２の足助（あすけ）町のベンチが事例で紹介されているが、これでは不明瞭であると思う。ベンチにクロスなどかけたら、雨が降った日などは誰が管理しているのか、常に綺麗に保っていることが事例とするのであれば、そのような説明も入れないと、このままでは何が良いのかよく分からない。また、にぎわいにつながるかどうかは不明だが、歴史が感じられる、というと一般的には木製で素敵な、クラッシックだけれど、座ってみたくなるベンチの設置、そのような事例があった方が良いのではないかと思う。また、電線類の地中化は非常に費用がかかり、童・銅人形の魅力は、あのようなモニュメントを作っているまちというのは世の中には山のように存在するが、行田市は里親制度を作って、花を飾り、綺麗にして、保っている活動が恐らく良いのだと思う。童・銅人形を製作した作家ももちろん良いが、それを大事にしていつでも誰が見ても、素敵だと思える状態を保っていることが行田市の良いところなのだと思う。その点を取り上げてみてはいかがか。現在、取り組んでいる活動にその点を加えられれば、交流人口の増加に繋がり、沢山の市民の方が集まれば、様々なアイデアが出て来ると思うので、どこかに取り入れられればよいと思う。
事務局（中島）	・足助町の写真の出し方は非常に良くなくて、本当はこの写真のベンチの後ろ側に白壁の家があるが、足助のまちに行ったことある方は御存じだと思うが、その白壁のまちに白のクロスがかかっているのが綺麗に調和しているというのが本来の意味合いのはずだが、そのクロス、ベンチだけがアップで写っている。行田では、店の中をちょっと覗きたくなるような雰囲気を醸し出していく、そういった意味合いで店舗前空間は非常に重要で

	あり、その点をよりわかるような見せ方を提示していきたいと思う。 採決
田尻委員長	・他に質疑がなければ、ただいまの意見を踏まえて内容を吟味し一部修正を加え、計画書に反映していく。 審議終了 ４　そ の 他 ・事務局より次回開催日程について事務連絡 第４回検討委員会 平成２６年１月２１日（火）午後１時３０分から 産業文化会館２階　２Ａ会議室 ５　閉　　会